

## V.E.フランクフルによる生命の意味： 『死と愛』を中心にして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福永, 草 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1817">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1817</a>

# V. E. フランクルによる生命の意味

—『死と愛』を中心にして—

福 永 草

## はじめに

人間が生きている世界には、楽しいことばかりではなく苦しいことも時に起こる。もし苦痛のないハッピーな人生を送ることができるならば、誰もがその道を選択することだろう。だが実際には、人間は様々な問題と遭遇することとなり、迷いを感じたり思い悩んだりするのである。このように、人間は人生において、時に「困難な状況」というものと対峙しなければならないのであるが、その際には一体どのように置かれた状況と向き合っていけばよいのだろうか。また、眼前の避けては通ることのできない難しい問題に対して、人間は如何なる対策を取るべきなのだろうか。

オーストリアの精神科医、心理学者であるヴィクトール・エミール・フランクル<sup>1</sup> (Viktor Emil Frankl, 1905-1997、以下「フランクル」と略記) の思想は、上記のような議論を解決する可能性を秘めていると考えられる。フランクルは、人間が生きていくにあたっての「意味」というものを詳細に検討している。何が人間にとって意味のあることであり、逆に何に意味を見出すべきではないかを考察した上で、フランクルは生命や人生とどのように向き合うとよいのかを示したのである。

本論の主題は、フランクルが示した思想の中から、特に「生命の意味」に焦点を当てて検討を行うことを目的とする。なお、本論はフランクルの著作『死と愛』<sup>2</sup>で論じられている内容を中心に考察を行っていく。

## 1. 快樂や幸福の追求

人間は、生きている存在である。そして生きている人間は、生命を有している状態にあると言ひ換えることもできる。このように存在している人間の中には、「生きているとは、一体どういうことなのだろうか」と自らについて振り返り、考えようとする人も多くいるに違いない。フランクルも、人間における生命の意味について以下のように述べている。

生命（人生）の意味に関する問いは、たとえそれが述べられなくても、あるいは不明瞭にしか言われなくても、本来的に人間的な問いという特色をもっているのである。……それは……人間存在の本来の表現そのものであり、まさに人間における最も人間的なものの表現な

のである。(『死と愛』33頁)

自身が命を有しているという事実に対しての問いについて、人間はいつも意識できている訳ではなく、かつその疑問点を明確に表現できている訳でもない。しかし人間は、心の奥底ではその問いに大きな関心を抱いており、この生命の意味に対する問いは、実は人間が営んでいる日常生活の中にも深く入り込んでいる謎なのである。そして、この問いに関心を持つことは至極人間的な営みであり、さらに言えば、この問いに関心を持つこと自体が人間であることの証明なのだと考えられる。

では、生命や人生の意味について考えるとき、一体どのような観点から検討を行えばよいのだろうか。フランクフルはまず、「快樂」との関係から考えることを試みている（なおここでの快樂とは、生物として感じ取る衝動性を伴った快適な刺激であると解釈する）。フランクフルは、「生命の意味は快樂を得ることである」という主張に対して批判的な検討を行ったのである。人間には、楽しいことや気持ちのいいことを追い求めて、日々生きている側面がある。美味しいものをたくさん食べる、好きな人と心地よい時間を過ごす、可笑しいテレビ番組を見て楽しむなど、快感を得るために人間は努力を惜しまない。人間には食欲、睡眠欲、性欲という三大欲求が備わっていることからわかるように、人間にとって心地よさや気持ちよさ等の快樂は必要不可欠なものである。しかしフランクフルは、快樂のみを追及すること、快樂が生きる意味の最上位であると解釈することについては異論を唱えている。そのことを、フランクフルは端的に以下のように示している。

現実に於ては快感は一般的にはわれわれの諸欲求の目的ではなくて、その充足の結果なのである。(『死と愛』43頁)

人間は、自身の人生における「目的」であるから快樂を求め、その快樂に生命の意味を見出すのではない。そうではなくて、欲求を満たせた際に「結果的に」快樂を得ることができるのだとフランクフルは考える。そのため人間は、「快樂を求めれば求めるほど、その目標は失われ」<sup>3</sup>てしまうことを肝に銘じておくべきである。つまり人間の行為は、単に快感原理<sup>4</sup>によって規定されるべきではないのであって、生命や人生の目的は、快樂とは別のところに見出す必要があると考えられるのである。関連してフランクフルは、以下のように続けている。

もしわれわれが実際に単なる快感の中にすべての生命の意味を見ようとするならば、生命は結局無意味なものとならざるを得ないであろう。(『死と愛』44頁)

繰り返しになるが、快樂は目的のではなく「一つの状態」に過ぎないのである。もし快樂のみを生命の意味であると捉えるならば、そのような生命の状態ではむしろ意味を見出せなくなり、無味乾燥で味気のない人間の生、つまり人生となってしまうとフランクフルは述べているのである。

では快樂が生命の目的、意味とはならないとなると、「幸福」はどうであろうか（なお今回の議論における幸福とは、人間が人生を快適に送れている状態であると想定する）。一般論としても、幸福でありたいとの願いは、万人に共通するものであると思われる。「早く幸福になりたい」とか、「なるべく不幸は避けて過ごしたい」などと考えながら生きることは、人間にとって自然なことである。そのため、一見すると幸福という指標が生命の目的や意味になると考えられても不思議ではない。

しかしフランクルは、幸福そのものを目的として求めることはできないとしている。なぜなら、人間の幸福にはある程度の快樂が含まれていることが理由の一つとして挙げられるからであるが、加えて幸福がある特性を有していることもそこに関連してくるといえる。フランクルは、「『幸福の追求』そのものによって、皮肉なことに「幸福」は妨げられてしまう<sup>5</sup>という重要な指摘を行っている。つまり、幸福を第一の目的として追い求める人、強引に幸福になろうとする人は、逆に幸福への道が閉ざされる「幸福のパラドクス」の状態へと陥ってしまうのである<sup>6</sup>。フランクルは「図1」<sup>7</sup>のように、幸福は目標達成の「結果として」得られるのであって、そもそも幸福を「意図的に」手に入れることなどできないと考える。そのため、「あらゆる人間的な行為が結局は幸福への努力によって支配され」（『死と愛』42頁）ていると解釈することも、間違いであることがわかる。

むしろ、幸福に関しては以下のように向き合うべきだと、フランクルはドイツの哲学者イマヌエル・カント（1724-1804、以下カントと略記）を援用しながら述べている。

カントが人間は幸福であることを欲するべきではなく「幸福にふさわしく」あることを望むべきであると言ったのに対してわれわれも人間は本来幸福であることを欲するのではなくて、むしろ幸福であることの根拠を欲するのであると述べたい。（『死と愛』180頁）

直接、幸福自体を求めるのではなく、幸福に「ふさわしい」状態や幸福に「値する」ような人間の在り方が目指されるべきなのである<sup>8</sup>。つまり幸福になろうとしたり、幸福そのものに強い関心を示したりするのではなく、幸福になるための「根拠」の方に目を向ける必要があることをフランクルは訴えているのである。

以上のように、「快樂」や「幸福」そのものを追求したとしても、人間はそれらを手に入れないことをみてきた。欲求を満たせた時に、目標達成ができた時に、結果として自然発生的に生じるのが快樂や幸福なのである。その事実から、快樂や幸福自体を追いかけても、それらは人間の「生命の意味」とはならない<sup>9</sup>ことが導かれる。では人間は、自らの生命や人生において、如何なる意味を見出すことができるのだろうか。

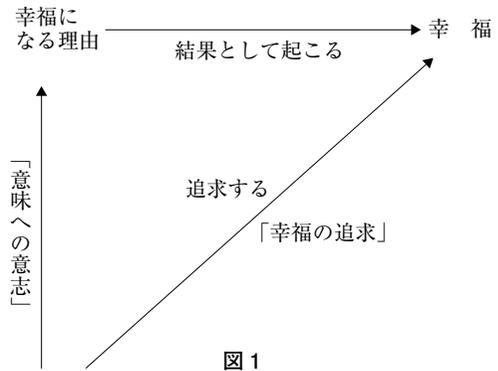


図1

## 2. 生殖と結婚

続いてここからは、「生殖」や「結婚」は人生の目的となるかどうかについて考えてみたい。世間的にも「結婚をして、子供を産み育てること」は一人前の大人の証であるかのように言われることがあるが、これらのことは果たして本当に人間の生命の意味となりうるのだろうか。

まず先に、「生殖」について検討をしてみたい（ここでの生殖という語は、自らの子孫となる子供を産んで育てることと定義する）。確かに私たち人間は、子供を産み育てることが自らの（人間としての）役割だと考えがちである。それは自然な営みであり、決して間違いではないだろう。しかし、ただ単に自身の子供を産み育てることが生命の意味だ、と解釈することに対しても فرانクルは異論を唱えている。もし、生命が継続されること、家系を続かせることだけに意味を見出そうとするならば、家族や子孫が何らかの不運や不幸により死に絶えた際には、その意味が失われることになってしまう。また子供のいない家庭もあるし、未婚の人もいる中で、この考え方に固執するのは、人間の側面しかみようとしない立場だと言わざるを得ないだろう。また極論ではあるが、遠い将来に人類の滅亡や地球の終末が訪れた際には、それまで生きてきた人々の積み上げてきた意味のすべてが失われることになってしまう<sup>10</sup>。そのため、「もし生命が意味をもっているならば、その時それはその長短や子孫の有無とは無関係に意味をもっている」（『死と愛』79頁）と考えるべきであろう。長生きすることや子供がいることが重要なのではない。それらは単なる「一つの状態」に過ぎず、生命の意味とはなり得ない。生命の本質は、もっと別のところにあるのである。そしてフランクルは、さらに以下のように続けている。

かくしてわれわれは、その唯一の意味が子孫を残すことの中に存する生命はそれ自身として無意味になるという逆説に到達するのである。反対に生命が子孫を残すことは、すでに生命がそれ自身ある有意味なものを示しているときに初めて意味をもつのである。（『死と愛』80頁）

もし、生命の意味は子孫を残すことだけにしか見出せないと解釈するならば、人間の生命は無意味なものにならざるを得ないだろうと、フランクルは考えるのである。確かに子供が生まれることは素晴らしいことであるが、それは人間の生命や人生の意味とは一旦分けて考えるべきことであり、そのこと自体が人生の第一目的とはなり得ないのである。つまり、人間が有している生命の意味を理解し、実現できている場合にのみ、連関してその人間が子孫を残す際にも意味が生じてくることとなるのである。フランクルは、生命や人生にはより深い意味があることを以下のように示している。

むしろ生命はその意味を精神的、倫理的、美学的などの、非生物学的な諸連関から初めてうるのである。したがってこれらの諸連関は超越的な契機を示している。生命は自己自身を、子孫を残す意味での「長さ」の中に超越するのではなく、価値を指向する「高さ」の中に、あるいは協同体における「幅」の中に超越するのである。（『死と愛』80頁）

子孫を残すという生物学的な意義も、それは生きる理由の「一つ」でしかない。人間は、より幅広い多様なものごとの繋がりの中を生きている。例えば精神面を豊かにすること、倫理的な振舞いを行うこと、そして美しいものに感動することなどが人生には含まれており、それらの総合が生命の本質であり、意味となるのである。さらに有意義な価値<sup>11</sup>を実現していくこと、そして多くの他者と協力し合い交流の輪を広げていくことなども生命や人生の意味となり得るのである。

続いてここからは、生殖に関連して「結婚」が生命の意味となり得るかについても検討を行いたい（なおここでの結婚とは、社会的に認証された配偶関係を結ぶことと解釈する）。これまでの議論を踏まえるならば、ただ単に結婚をするだけでは、その行為が生命や人生の意味とはならないことが理解されるだろう。結婚自体に意味を見出すことはできないが、もしその人にとって有意義で良好な対人関係を育める結婚ができるのであれば、その際には当人の人生は意味のあるものとなると考えられる。フランクルが関わった患者の一人に、遺伝病を持っているために計画していた結婚を中止しようとしていた人物がいた。そこでフランクルは、以下のようにその人を励ましたという。

そこで当然、結婚の意味は生命の意味と同様に決して生殖の中に存するのではないことを彼に指摘することが必要であった。生理的な衝動充足と生物学的な子供を生むこととは結婚の二つの側面に過ぎないのであって、決して最も本質的なものではない。愛の幸福の心理的な契機、或いは協同の仕事に励むことの精神的な契機がより重要なのである。（『死と愛』81頁）

結婚の本質は、パートナーと心を通わせて愛情を育むこと、そして協力し合い生活を営むことにあるのであって、快楽の充足や子供を生むことのみが結婚の目的となる訳ではない。そのため、障害の有無に関わらずその人にとって有意義な結婚<sup>12</sup>ができるのであれば、その時に当人の人生や生命は意味を有することができるようになると考えられる。それは要するに、先の引用でも確認した「協同体における「幅」の中」（『死と愛』80頁）に見出すことのできる「生命の意味」なのだと考えられる。さらにフランクルは、以下のように続けている。

もしあらゆる人間が完全であるならば、その時すべてはそれぞれ同等であり、各個人は任意の別な人間によってとって代えられうるであろう。しかしまさに各人が不完全であるということから各人の欠くべからざることや他人と変えられえないことが生ずるのである。なぜならば各人はなるほど完全ではないが、しかし彼独自の様式をもっているのである。各個人は完全ではなく一面的であるが、しかしそれによって独自の存在である。（『死と愛』81-82頁）

障害の有無に関わらず、人間はみな不完全な存在である。長所も短所も持ち合わせており、できることもあればできないことも当然ある。しかし、だからこそ「その人らしさ」が生じることとなり、その個性は「かけがえのなさ」となるのである。他の人間と異なっているということが、つまり「独自性」を有しているということが、その人の生命に意味を与えることになると考えられる。そして、かけがえのない独自性を持つ人同士が、お互いを尊重し合いながら双方に

とって意義ある結婚をするのであれば、当然そこには「生命や人生の意味」を見出すことが可能になると考えられる。

### 3. 責任を果たす生き方

更にフランクルは、人間の生命や人生の意味を「責任」という視点からより深く読み解こうとしている。責任についてフランクルは、自らの独自性を引き受けて生活をしていく「使命」を果たすことに対して、更には人生の各状況で「価値」を実現することに対して、双方を人間の義務であると理解して生きることだと定義している。そこでまずは、人間が果たすべき使命というのがどのような特徴を有しているのか、以下のフランクルの説明をみていきたい。

……使命は、各人の独自性に基づいて各人ごとに異なるばかりでなく、また各状況の一回性に相応じて、各時間ごとに変わる……。『死と愛』66頁)

それぞれの人間は独自性、唯一性を有している存在である。そのため、各々は異なった使命を持っている。さらに同じ人物内においても、当人は自身の人生を一度しか生きることができない。それ故に、異なる時間や状況によって生じる使命はその都度変わることとなる。それはつまり、人間が引き受けるべき使命とは「瞬間瞬間、その人その人」によってちがうと同時に、答えの出し方も人それぞれちがう<sup>13</sup>ことになる。この事実から、人間が有している使命は、二重の意味での使命であることにも気づかされる。一つの意味での使命だとしても大切であることがわかるが、二重の意味での使命であることを理解すると、より自身が担っている使命の重要さが認識されることだろう。

ではここで、使命の根拠となっている独自性や状況の一回性について検証をしてみたい。当人が独自性を有しておらず、他者との相違点もなくなった状況を想定してみよう。さらに一回性などなく、同じ状況が繰り返される、もしくは何時でも変更が可能な状況というものを考えてみよう。果たして彼は、そのような状況の中で生命や人生の意味を見出せるだろうか。恐らくそれは無理であろう。なぜならこの仮定では、当人が有限の生きている人間ではなくなってしまい、彼自身の使命というものが生じなくなってしまうからである。つまり当人の使命の所在がわからない状況では、生命や人生の意味を見出せなくなってしまうと考えられるのである。やはり、「独自性と一回性とは人間の生命の意味にとって決定的」(『死と愛』74頁)なのである。

独自性と状況の一回性の中を生きる使命を持つ人間は、代替ができず、かつやり直しがきかない状況下を生きているが故に、そのような人生を引き受ける「責任」が生じることになる。この件について、フランクルは自身の代表的著作である『夜と霧』の中で、以下のように説明をしている。

この各個人がもっている、他人によってとりかえられ得ないという性質、かけがえないということは、一意識されれば一人間が彼の生活や生き続けることにおいて担っている責任の大きさを明らかにするものなのである<sup>14</sup>。

まずは、自分自身の唯一性に気づき、自覚していくことで、自らに割り当てられた自身にしかできない使命というものを意識することができる。そこから、自らが担うべき責任が明確になっていく。この、明らかになった責任を誠実に果たしていく生き方こそが、人間にとっての生命や人生の意味になるとフランクルは考えたのである。例えば、同じ困難な状況に見舞われた人々がいたとしても、向き合う人が異なれば違う選択をするだろう。また、ある人が時間的に異なる場面で二度、同じ問題と向き合ったとしても、二回とも同じ応答をするとは限らないのである。このように、各々が各状況で向き合うべき使命は異なり、そこで果たす責任も違うものとなるのであるが、それ故に私たち人間はそれぞれが尊く意味のある存在となることができるのである。

続いて、生命や人生の意味を責任という視点から検討するためのもう一つの鍵として、「価値」と責任の関係について考えてみたい。この件に関して、フランクルは以下のように説明している。

即ち人間の生命はその意味を「極限まで」保持しているのである。従って人間が息をしている限り、また彼が意識をもっている限り、人間は価値に対して、少なくとも態度価値に対して、責任を担っているのである。人間は意識存在をもっている限り、責任性存在をもっているのである。価値を実現化するという彼の義務は人間をその存在の最後の瞬間まで離さないのである。（『死と愛』54頁）

人間は、実は生命が続く限りその意味を持ち続けているのである。なぜならそれは、（使命を果たす責任を有するからだけでなく）価値を実現化する責任を人生の最後の瞬間まで担っているからである。フランクルは三つの価値を提唱している。何かを創造する際や、仕事に打ち込む中で達成される「創造（的）価値」。自然や芸術に感動した時や、素晴らしい愛の経験によって得られる「体験価値」。そして、避けることのできない苦しい状況に追い込まれた際に、その苦難を誠実な態度で引き受けることで実現化される「態度価値」があるという<sup>15</sup>。人間は、各々が有している異なる使命を意識し、実践し、さらには上記のいずれかの価値を実現化する責任を果たしていくことを、人生の最後の瞬間まで求められているのである。そして、このような人間の責任や義務が、意識を有して息をし続けている限り私たち人間を離すことはないということは、そこから更に、私たち人間が生き続けている限り生命や人生の意味が失われることはないという事実も明らかになるのである。

#### 4. コペルニクスの転回

先にもみてきたように、もしそれぞれの人が異なった使命や責任を果たしていくならば、言い換えれば万人に共通する使命や、如何なる時も同じように求められる人間の使命というものはないことが理解される。この内容について、フランクルは以下のように述べている。

この普遍妥当的な、すべての人に義務を負わせる生活使命というものは実存分析的な観点においては不可能に思われる。すなわち生命における一つの固定した使命ないし意味を問うことは無意味である。（『死と愛』72頁）

すべての人に普遍的に当てはまる使命、というものは存在しない。各々の状況に応じた使命をそれぞれの人が果たしていくことが求められているのであり、万人に共通する生命や人生の意味というものを定義することは、実はできないのである。ところで、「1. 快楽や幸福の追求」において生命や人生の意味に関する問いは人間的な問いであること、そしてこの問いに関心を持つことは人間としての証であることを確認した。だがしかし、ここに一つの疑問が生じる。問いとしては正しいのに、それ自体を問うことは無意味であるとは、一体どういうことなのであろうか。この件に関して、更にフランクルは以下のように論じている。

すなわち生命そのものの意味に関する問いは無意味である。なぜならばその問いは、もしそれが漠然と生命を意味し、具体的な「各々の」実存を意味しないならば、誤って提出されたものであるからである。(『死と愛』73頁)

これまでの議論の再確認となるが、単なる生物としての側面から人間を解釈し、そのような生命の視点から人間全体の意味を問うことは無意味である、とフランクルは述べているのである。では、独自性を持った各々がそれぞれ異なった意味を問うことを「誤りなく」行うためには、一体どうしたらよいのだろうか。

ここでフランクルは、生命の意味に関する重要な観点があることを示している。万人に共通する、漠然とした生命の意味はないとしながらも、すべての人間が取り組むことのできる生命の意味との「向き合い方」があると述べている。それは、次のようなものであるという。

……われわれは生命の意味に関する問いにコペルニクスの転回をなさなければならない。すなわち生命自身が人間に問いを提出するのである。人間は問いを発するべきではなくて、むしろ生命によって問われているものなのであり、生命に答えるべきなのである。(『死と愛』73頁)

フランクルは生命や人生の意味を考えるにあたり、「コペルニクスの転回」<sup>16</sup>という認識の転換の必要性を訴えている。それは、人間自身が「(私の)生命にどのような意味があるのか」と問うのではなく、反対に生命や人生の方から私たち人間に「どのような意味が(あなたの)生命にあるのか」と問われていると考えるべきだというものである。単身で孤独に存在している「私」としての人間が、自らの「足りない」ものを嘆く視点から、関係を持つ「あなた」としての人間が、「残されている」自らの可能性を探る観点へと移行するのである。それはつまり、生命や人生に対する認識を180度変えてみることを意味している。人間は、日常において嫌なことや辛いことがあると「なぜ俺ばかりが苦しまなければならないんだ」とか、「こんなことをしたって意味なんかない」と自暴自棄になってしまうことがある。そして時には、人生に絶望してしまう。だが、そのような状況に置かれたときでも、まずは人間の側から生命や人生の意味を考えることはやめて、生命や人生の側から「何を問われているか」耳をすませてみる。その上で、生命や人生が人間に対して問っている内容を理解しようと努力し、その問いに応答していくことの必要性をフランクルは訴えているのである。

生命や人生における問いの観点の転回、つまり「コペルニクス的転回」以前においては、人間は自己を世界の中心であると捉え、自己の利益を優先させる生き方をしていたと考えられる。ここでは、自分にとって都合のよい世界が想定されていた。つまり、この段階における生命の意味や「目的は自己の生存にあり、その目的のために世界が手段化されて」<sup>17</sup> いたのである。人間は時に、「人生の手段」と「人生の目標」を取り違え、前者のみを追求して後者をなおざり<sup>18</sup> にしてしまうことがある。そこでは、いかに世界が（私にとって）役に立つのかということが主要な関心事となっている。しかしそれは、恵まれた境遇にあるときにしか通用しない。もしひとたび危機的な状況に見舞われたならば、「そのような自己中心的な人生観ではこの限界状況に耐えることができない」<sup>19</sup> のである。なぜなら「この観点では、「すべては私のため、ではその私は一体何のためか」という問いには答えが見出せない」<sup>20</sup> からであり、ひいては苦しい状況を本当の意味で乗り越えていくことができないのである。

危機的な状況に見舞われ、私の人生の意味を改めて問いたくするとき、実は（自らの利益と絡まった）人生の意味など無かったことに気づかされるのである。むしろ自分以外の他者、つまり身近な家族や友人、仕事や地域で出会う人々に対して、私は何ができるのか、何をしてあげられるのかということに関心を寄せ、行動していくことによって、真の生命や人生の意味が浮かび上がってくるのである。人間は、「人生それ自体が何かであるのではなく、人生は何かをする機会である」<sup>21</sup> という問いの観点の転回に気づき、理解しなければならないのである。

フランクルは、各々の生命やその意味というものを、その人が所有しているものとは考えず、むしろ生命や意味を人間から一旦切り離れた上で、さらに擬人化、対象化している。そして、人間の目の前にいる（私に付随する）生命やその意味が、逆に人間に問いかけてきていると解釈するのである。「あなたはこの困難を如何なる問いであると解釈し、如何なる態度で向かい合うのですか？」と。このように生命や人生を擬人化、そして対象化し、主体と客体が入れ替わり、問われるものから問うものへと立場を逆転させたところに、フランクルの思想の意義を見出すことができると考えられる。

## おわりに

以上のように、フランクルによる「生命の意味」についてみてきた。「快樂」や「幸福」は結果として得られるものであり、それ自体を追い求めても生命の意味とはならないことを確認した。同様に「生殖」や「結婚」においても、それらは人生の目的の最上位とはならず、生きる理由の一つでしかないことを検討した。むしろ人間は、「その人らしさ」や「かけがえのなさ」といった「独自性」を有していることを自覚し、そこから生じる「使命」や人生における「価値」を実現していく「責任」を果たす生き方にこそ、「生命の意味」を見出すことができることを確認した。さらに、生命の意味に「向き合う」際には、人間の側から意味を「問う」のではなく、反対に生命や人生の方から意味を「問われている」と解釈する必要があること。つまり生命の意味に関しての、問いの観点の「コペルニクス的転回」という概念が求められていることについても考察した。

なお、筆者自身は精神科病院で（作業療法士として）働いているため、毎日向き合っている患者様を理解・支援する際に、フランクルの思想を学んだことがとても活かされることとなった。また、私自身が生きる意味を考えたいという思いもあったため、今回このような課題に取り組めたことは、正に私の「使命」であり、「責任」でもあったと感じている。

また偶然にも、この論文に取り組んでいる最中に、世界中に新型コロナウイルス（COVID-19）が蔓延し、人類はこの感染症の影響で甚大な被害を受けることとなった。不幸にも多くの人々が亡くなり、生きている人々もこれまで経験がないような社会生活上の制約を受けている。この事実は、「新しい苦悩と向き合わなければならない時代になった」ことを意味するのではないだろうか。このような困難な状況の中を生活していかなければならない私たちにとって、フランクルの思想について検討することは、とても有意義なことであると考えられる。

なお本論では、『死と愛』における「生命の意味」のみを検討してきたが、同著の中でフランクルは他にも、「死の意味」や「苦悩の意味」などについても論じている。別の機会があれば、それらについての考察も行っていきたい。

## 謝辞

本論は、2020年度特定課題研究として提出した論文に一部加筆修正をしたものである。本研究において、武蔵野大学佐藤裕之教授より多大なるご指導を頂きました。ここに深謝いたします。

## 注記

- 1 フランクルは第2次世界大戦中に、ナチス・ドイツによる強制収容所での生活を3年間強いられたが、奇跡的に、そして力強く生き延びた人物としても有名である。その体験を著作内で語りながら、「ロゴセラピー」（「生の意味」を見出すことで心の病を癒す心理療法。「実存分析」ともいう）を提唱したことも知られている。
- 2 このフランクルの著作（原題は“*Ärztliche Seelsorge*,” 6. Aufl. 1952）からの引用は、V.E. フランクル著、『死と愛 実存分析入門』、霜山徳爾訳、みすず書房、1999年を使用する。また、頁数で引用箇所を示すこととする。なお、この著作はフランクルが強制収容所内で隠れて原稿を作成（再現）し、解放後の1945年に出版されたデビュー作である。
- 3 広岡義之著、「V・E・フランクルにおける「幸福」「愛」「働くこと」の人間学的一考察」、『梅光学院大学・女子短期大学部論集』（39）、2006年、2頁。
- 4 フランクルの快樂主義への疑念は、オーストリアの精神科医であるジークムント・フロイト（1856-1939、以下フロイトと略記）に対する批判と関連する。性欲のみが人間（の無意識）に対して支配的であるという、フロイトの「還元主義」とも言える問題点を乗り越えることは、フランクルが自身の思想や人間観を展開するにあたっての主要なテーマであったとも言われている。
- 5 広岡義之著、前掲書、2頁。
- 6 諸富祥彦著、『フランクル心理学入門 どんな時も人生には意味がある』、星雲社、1997年、84-87頁参考。
- 7 ヴィクトール・E・フランクル著、『意味への意志 ログセラピーの基礎と適応』、大沢博訳、ブレーン出版、1979年、40頁。
- 8 フランクルは度々、カントを援用して議論を展開しているが、先の引用箇所は幸福主義（功利主義）と対立するカント倫理学（義務論）の影響を強く感じることができる。なおフランクルは、以下のようなカントの主張を参考にしたと考えられる。「それだから道徳論は、我々はどうすれば自分を幸福にするかということについての教えではなくて、どうすれば幸福を受けるに値いするようになるべきであるかということについての教えである」。カント著、『実践理性批判』、波多野精一、宮本和吉、篠田英雄訳、岩波書店〈文庫〉、2007年、260頁。

- 9 『死と愛』の中で直接は述べられていないが、フランクルによると「快樂」や「幸福」の追求と同様に、「健康」を追い求めることも人生の目的とはならない。「……健康を維持することは人生における目標ではなく、……本来の「人生の目標」を実現のための一つの「手段」あるいは「前提条件」でしかない……」。牧野智恵著、「V.E. フランクル理論における病の中の苦悩の意味の検討—「意味への意志」に焦点を当てて—」、『石川看護雑誌』(8)、2011年、121頁。
- 10 科学的には（諸説あるが）、太陽が膨張し続けることによって数十億年後には地球上の生命が絶滅し、最終的に地球は太陽に飲み込まれてしまうと考えられている。それは気が遠くなるほど未来の話であり、かつ地球史の終焉という壮大で想像もできない状況である。しかし、このような極論を検討してみると、今「今」を生きる私たち人間の生命の意味について考察しやすくなる側面もあると考えられる。
- 11 フランクルの思想は、彼自身が示した三つの「価値」を実現していくことに重きが置かれている。本論の「3. 責任を果たす生き方」において、簡易的にはあるがフランクルの価値概念について論じる。
- 12 障害と結婚の関係について検討する際には、注9でも確認したように、「健康」を生命の目的、意味とすることはできないという観点が重要になると考えられる。
- 13 牧野智恵著、「V.E. フランクル理論における病の中の苦悩の意味の検討—「意味への意志」に焦点を当てて—」、『石川看護雑誌』(8)、2011年、124頁。
- 14 V.E. フランクル著、『夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録』、霜山徳爾訳、みすず書房、2013年、186-187頁。なお、この著作は強制収容所を体験した医師の立場から記されたフランクルの代表作であり、ワシントンの国会図書館から「アメリカで最も影響を与えた十冊の本」の一つに推薦されている。『死と愛』を発表した翌年（1946年）に出版された。
- 15 価値に関しては、「人間は活動において創造的価値を、体験において体験価値を、苦悩において態度価値を実現する」（『死と愛』123頁）という端的な説明がなされている。フランクルは三つの「価値」の中でも、特に「態度価値」という概念が重要であるとしている。
- 16 カントが、伝統的な認識論に対して行った画期的な発想の転換（客観が主観に依存すること）を「コペルニクス的転回」と称したことにならって、フランクルもこの言葉を使用したと考えられる。それは物事の見方や認識が180度変わってしまうことを意味しており、「パラダイム転換」と同義でもある。なお、N. コペルニクス（1473-1543）はポーランドの天文学者であり、それまで定説であった「天動説」に対して「地動説」を提唱したことで知られる。
- 17 今井伸和著、「フランクルの人生論—フランクルとハシディズム」、『フランクルを学ぶ人のために』、山田邦男編、世界思想社、2006年、177頁。
- 18 同上、171頁。
- 19 牧野智恵著、前掲書、123頁。
- 20 今井伸和著、前掲書、177頁。
- 21 廣岡義之著、「フランクルにおける『態度価値』の人間学的一考察—「悲嘆教育」の可能性との関連で—」、『梅光学院大学・女子短期大学部論集』(36)、2003年、9頁。